

神々と人間の断絶

——ヘシオドスの『名婦列伝』におけるゼウスの意図——

古 沢 ゆ う 子

I

古来ヘシオドスの作とされてきた『名婦列伝』(ΓΥΝΑΙΚΩΝ ΚΑΤΑΛΟΓΟΣ または HOIAI)⁽¹⁾の断片をつきあわせてその構造を明らかにしようとする研究は最初から容易に解決のつけがたい困難な問題を含み種々の課題を提供してきた。そのさいメルケルバッハとウェストのなした功績は大きい。メルケルバッハはすでに1956年、新しく発見されたパピルスの発見の大きさと意味を Die Hesiodfragmente auf Papyrus⁽²⁾で述べていたが、十年後ウェストとともに Fragmenta Hesiodica で、それまでに公表されたパピルス断片と古典文献に見られる引用断片とを編集し、作品全体の構想を明らかにしようとして試みた⁽³⁾。そしてウェストが1985年、個々の断片とその内容を仔細に検討して作品の性格と構造と起源について論議をつくした研究を発表している⁽⁴⁾。

しかしウェストのこの研究においてもまだなお作品の全体的構造が説明しつくされたとは言いがたい。もちろん断片というかたちにおいてしか伝承されていない作品の全体像を明らかにするのは不可能に近いことであろう。そこで、この作品に関する研究は多かれ少なかれ推論とならざるをえないのだが、序歌と他の断片との関わりについては、いま少しの検討によってなんらかの成果が得られるのではないかと考える。

前世紀に G・マルクシェッフェルが⁽⁵⁾すでに、このカタログが全体としてきっちり系図的に配置されアポロドーロスの『ビブリオテーケー』の構成におおよそ相当する基本システムに従っていると主張しているが、ウェストは新しく発見された多くのパピルスによってこの説の正しさを証明するに十分な資料を手に入れることができたとする。そこで、個々の断片がどう配置されるかという当面の問題は少なくとも大半は片付いたとみなされてはいるものの、なお検討すべき課題として残っているのは、小断片の精確な順序といった些細な問題のみではない。従来の研究が集中的に取り組み

ながらまだなお結論を出し得ていない基本的問題が、いままで以上に重要性をもってきていると思われる。

メルケルバッハとウェストの校刊は「アイオロスの子孫 (断片 10-121)」「イナコスの子孫 (断片 122-159)」「ペラスゴスの子孫 (断片 160-168)」「アトラスの子孫 (断片 169-204)」という4つの大きな部分に分けられているが、この基本配列の正しさをウェストは1985年のモノグラフィーで見事に立証してみせている。そこで、この作品の構成が原則的には全ギリシアの名高い家系の系譜であり、ある家系の祖から始まって系図をたどり、子孫のそれぞれの勲がカタログ風に物語られる貴族名簿のようなものであることはほとんど疑いをいれないと言えよう。

ところが、これは序歌で述べられる作品の内容とはまるきり一致しないようにみえる。序歌ではこの作品の主題は男神との間に子をなした人間の女たちであると言っている。断片1には「さて女たちの族を歌え、甘い調べのオリュムポスの詩女神よ、……彼女たちは当時、もっとも高貴で……帯を解き……神々と交わり…… (1-5行)」とうたわれているからである。だとすればこの詩では、不死の神々との間に子をなした死すべき人間の女たちについてのみ語られるべきである。

このように主題の表明は誤解しようなく明らかであるから、この作品はアポロドーロスの『ビブリオテーケー』に類似した構造を持ち得ないというのが、1983年の論文でメルケルバッハとウェストの説に反論を試みたK・ハイリンガーの主張である⁽⁶⁾。『カタログ』の系図は基本的には母系的でなければいけないとハイリンガーは強調する。アポロドーロスの場合と異なりこのカタログでは男たちは系図の構成の中で補助的役割しか与えられていないというのだ。そしてハイリンガーはマルクシュェッフェルがすでに言及した推測ではあるが、*ehoie* (*ἡ' ὀλή*) という定式つまりある神に愛された「このような女」という定まった形式の始まりをもついくつかの語りの単位によってカタログが成り立っていたという仮説をとる。ハイリンガーの主張はマルクシュェッフェルよりふみこんだはっきりした方向をとる。すなわち *ehoie* の順序がどんな基準で定められたかは明確にできないもののカタログの配列原則は *ehoie* に帰すべきだというのだ。

ハイリンガーのこの仮説は全断片資料を仔細に検討したウェストの論証によって論破されたようにもみえるが、それにもかかわらずハイリンガーをこの仮説へと向けるきっかけとなった、作品自体に存在する矛盾は取りのぞかれたわけではない。それどころかこの矛盾に関する批判的論点がある意味ではより明確に前面に押し出されてきたと言えるかもしれない。

ウェストはカタログの構造における ehoie の機能については、くわしい議論を展開していないが⁽⁷⁾彼のモノグラフィーの173-182頁に記される系図では ehoie が系図の少なくとも基本的配列のもとになっていることを前提にしているようにみえる。とするとウェストは他の点ではアポドーロスの『ビプリオテーケー』の構成に準ずると言いながら、この点においては多分意識せずに矛盾していることになる。というのもアポドーロスにあっては、ウェストに順序づけられた「女たちのカタログ」の断片同様貴族名簿という傾向を持っており不死の神々と可死の女から生まれた者の子孫に関する記述のみを内容とするわけではない。それゆえ神々と人間の女の交わりを歌うと言明する序歌とカタログ断片の実際の内容との不一致がどう説明されるべきかという問いは避けるわけにはいかないことがあきらかである。

この問いに対して特に前世紀から今世紀初頭の研究者が出そうとした答えは、この序歌が現存する断片の構成する『カタログ』のために作られたのではなく、この序歌に続く別の『名婦列伝』が存在したというものである。

断片1 (P. Oxy. 2354) に記されている序歌の最初の2行は『神統記』の最後の2行1021-22と同じである。この2行がヘシオドス自身の手によるものか否かの疑問はさておいても⁽⁸⁾、『神統記』の最後にある女神たちのカタログと同じ長さ形式を持つカタログがあったという可能性はたしかに否定できない。しかし、現存する断片の形成する詩作品は、女神たちのカタログとは比べようもないほど長いので、『神統記』の最後で予告された「女たちのカタログ」そのものではありえない⁽⁹⁾。

それでは現存の『カタログ』がどのように形成されたかについて、ヴィラモーヴィッツが有名な雪だるま説で答えようとした⁽¹⁰⁾。「古い真の核に雪玉が転がるときのように」話がくっついて、詩作品が大きくなっていったというのである。自家の先祖に神々を持ってきたいというギリシアの貴族の要求によって、もとのテキストにつぎつぎと話がくり込まれ、最後に誰かが現在みられる形に編集したというわけである。

しかし、ウェストが立証したように『カタログ』はきっちりした構成をもち、随意に偶然のひきのばしや、付け加えて作り上げられたとは考えられない⁽¹¹⁾。古いカタログと新しいカタログがあるという説は、序歌と現存する『カタログ』の不一致を説明することにはならず、この問題を別の次元に持ち込むだけである。なぜならば、たとえふたつのカタログがあったとしても、断片1の序歌が他の断片とまったく無関係なのか、古いカタログの序歌が新しいカタログの内容とは無関係に冒頭に持ってこられただけのものなのか(だとするとよほど無神経な編集者によってくっつけられたことになるが)、それとも序歌と『カタログ』断片の矛盾はみかけだけで、解釈によっては

首尾一貫した構成をなしているのではないかと、との疑問が残るからである。

ある事実が矛盾とされるのは、対象が一面的にとらえられて観点の分化が不十分であるためであることが多いが、序歌の主題表明とそれに続くカタログの内容が一貫性をもってつながるような意味を序歌自体が有しているのではないかと、検討する必要があると思われる。

この問題をくわしく取り扱う前に（特にウェストもまたカタログの母系的傾向を認めているようなので）近年増大した現存の断片資料が、*ehoie* の役割の軽重は別としても「女たちのカタログ」または「名婦列伝」的な配置を許すかどうかの可能性も考慮せねばならないのだが、後述のように断片資料の構成をみれば *ehoie* は主的にも補助的にも「カタログ」の構成原則には何の役割も持たないので、このカタログが名婦列伝であった可能性はまったくないと思われる。もちろん、こう結論すると、序歌との矛盾が一見いっそう明らかになるので、この不一致の性格をくわしく調べる必要はさらに増す。

というのも、このカタログの構成は、たとえば *Maximus Tyrus*⁽¹²⁾ が言うように、基本単位が、神々の愛人である女と彼女の子孫の物語、つまりその女とある神の交わりで始まり彼女の最後の子孫で終わる物語であるかもしれないからだ。この作品全体が *Ehoiai* と呼ばれることもあることを考えると、このような基本単位の最初の行のはじめは *ἡ' ὀλῆ* であって、このカタログは同じように種分けされた *ehoie* の並列から成り立っているかもしれないのである。

また序歌では 6-13 行で名婦伝というテーマからそれたようにみえる考察がなされた後、14 行以下ではゼウス、ポセイドーン、アレース、ヘルメース、ヘーラクレスの子を産んだ女について歌うよう詩女神に再び呼びかけている。ということは、それぞれの *ehoie* を導入する順序の原則がこれらの神なのではないかとも考えられる。『神統記』の序歌も似たような構成を示すが、そこでは二度めの詩女神への呼びかけ（『神統記』36 行以下）はテーマの分化を示すだけでなく、次に続く神々の系図の構成を予告している⁽¹³⁾。それで、こちらの序歌における二番めの呼びかけも同じような機能を持つのではないかと推測するのだ。

ディオドーロスによると、イナコスの息子ポローネウスの娘ニオペーがゼウスの最初の人間の愛人であり、その 16 世代後のアルクメネーが最後だと神話記述者（*μυθογράφοι*）が書いているという⁽¹⁴⁾。もしこのことが彼の時代に存在した神話の系図にもとづいて言われているならば、ゼウスの人間の愛人たちが整理されている「ゼウスと人間の女たち」というひとつのまとまりをもった部分があってもいいはずだ。

『神統記』には神々と女神たちの結婚について、これに似たカタログの例が見られる(『神統記』886行以下)からである。そこで、M・トロイはそれぞれの神々とその愛人という構成をもつ『名婦列伝』を考えた⁽¹⁵⁾。

しかし、現存する断片で、同じ神がバビルス上遠く離れた箇所に登場したり、たしかにまとまった物語のなかに異なる神々が言及されるという事実は、明らかにこの説に反している。さらに重要なことは *ἡ ὀλῆ* という定式がこの作品の基本的な構造にも内容的構成にもほとんど意味を持たないことが立証されることである。

たとえば比較的大きい断片 23 a と 25 をみてみたい⁽¹⁶⁾。まず断片 23 a の 5 行目ではテストィオス (Thestios) の 3 人の娘レーダー (Leda) とアルタイアー (Althaia) とヒュベルメーストラー (Hypermetra) の名があげられる。そして 7-40 行はレーダーの子孫を扱っているが、7-8 行でテュンダレオスとの結婚、9-10 行では 5 行目と同じように、レーダーの 3 人の娘ティーマンドラー (Timandra) とクリュタイメーストラー (Klytimestra) とピューロノエー (Phylonoe) の名があげられる。10-12 行でピューロノエーにふれた後、13-30 行でクリュタイメーストラーに話が進む。アガムメノンとの結婚 (13-14) イーピメデー (Iphimede) とエレクトラー (Elektra) の誕生 (15-16)、イーピメデーの犠牲 (17-26) が語られた後、27 行から 30 行でクリュタイメーストラーの末子オレステースの誕生と彼の母殺しが続く。

このようにクリュタイメーストラーの子供がすべて言及されたところで、話は突然 *δ'* だけで結ばれて、それ以上なんのつながりもなく系図を一世代さかのぼりティーマンドラーに移る。ティーマンドラーがクリュタイメーストラーの姉妹であるとの説明はない。ティーマンドラーはテゲアーとアルカディアの領主エケモス (Echemos) と結婚し、ラーオドコス (Laodokos) を生む (31-35)。

36 行以下は破損がひどいが、39 行にかろうじて *θλοφορο* が読み取れる。*ἀεθλοφόρον* と補えば、これはカタログでポリュデウケースに付せられる Epitheton であるからレーダーの 3 人の娘の物語が語られて後、レーダーとゼウス、または彼女とテュンダレオスの息子について述べられていることが確かめられる。

つづいて断片 25 をみれば 10 行目にメレアグロスの名があるが、彼はアルタイアーとアレースの息子である。前述のように (注 16 参照) 断片 23 a と 25 は同一のバビルスの非常に近い位置に書かれているので、レーダーの娘と息子の物語が終わった後で彼女の姉妹アルタイアーの家系に話が進んだと判断される。13 行まではメレアグロスの黜と死が語られるが、14 行目で *τοὺς δ' ἄλλους Οἰνῆϊ [τεκ'] 'Αλθαίῃ κνα[ν]ῶ[π]ις* (しかし他の者たちを黒い瞳のアルタイアーはオイネウスのために生

んだ)という導入で4人の息子と1人の娘(デーイアネイラ)の名があげられている。わざわざこう記述されるのはメレアグロスのみアレースの子で彼女の人間の夫オイネウスの子と区別されるからであろう。たしかに4行目にはアレースの名がみえる。アルタイアーの娘デーイアネイラは、ヘーラクレスの妻となり4人の子をなしたが(18-19行)毒の衣で夫を殺す羽目に陥った(20-25行)。しかしヘーラクレスはいま神となってヘーラーと和解して神々の間で暮らしている(26-33行)。

ここで話はふたたび *g* だけを伴って突然ヒュベルメーストラーの家系へととぶ。ヒュベルメーストラーの名は断片23aと25の間にほとんど詩行がなかったとしても、少なくとも70行以上前にあげられているだけである。『カタログ』の読者や聴衆はよほど良い記憶力を持っていたと思われるが、作者の方も聞き手の記憶力に頼るのみでなく、語りの図式に関する了解が語り手と聞き手の間に成立していることを承知していたのであろう。つまり数十行も前に一度ふれられただけの名が突然告げられても、付加された *g* だけで、また前の世代が言及されることがはっきりしていれば混乱を招くことはない。

ここで取り上げた二つの断片の構造は上述のように語りの図式を明確にするのみではなく、序歌で言われるような *ehoie* (またはこのような女) の物語を包含している点で興味深い。すなわちアルタイアーとアレースの関係と彼等の息子メレアグロスの物語である。しかし、アルタイアーの物語がここでは独立した語りの基本単位を形成しているわけでもなく、アルタイアーによって独立した物語がはじまるわけでもなく、アルタイアーはテストィオスの3人の娘の一人として彼の家系図のなかでとりあげられていることがあきらかである。

これは序歌の主題を言葉どおりに受け取るならば奇妙なことである。序歌の言うとおりであれば、テストィオスの娘たちのうちレーダーとゼウス、そしてアルタイアーとアレースの物語のみが歌われなければならないはずなのだ。レーダーとゼウスに関しては伝承断片ではまったく触れられておらず、古註に矛盾した記述が見られるばかりである⁽¹⁷⁾。

アレースとアルタイアーの関係については、カタログも触れていると思われるが(断片25, 4行目)アルタイアーはアレースとの関係によって話の中で特別な位置を占めているわけではなく、家系図のなかで彼女に関して語られるべき順序どおりに彼女と子供について述べられているにすぎない。

もちろんアルタイアーの話の最初の部分が残っていないので、アルタイアーをアレースの子の母とみなさない別伝がここで語られていたかもしれない。しかし4行目に

アレースの名前が読み取れると推測されること、また14行目でアルタイアーの他の子供たちがメレアグロスとは別に彼女の人間の夫オイネウスとの間に生まれたと区別されていることからして、アルタイアーがアレースとの間にメレアグロスを生んだと述べられているのはかなり確実だと思われる。

神との間に子をなした人間の女すべてではなく、特定の女、それも大きな家系の祖となった女のみがカタログの語りの基本単位の *ehoie* として取り上げられた可能性も考えられる。ここで取り上げている断片ではそのように大きな語りの単位がたとえばデーモディケーから始まっていたかもしれない。断片22に記されているとおりデーモディケーはテストィオスの母であり、アルタイアーと同じくアレースに愛されたからである。彼女は断片23aと25で数えあげられている子孫すべての母祖であるから、23aと25でうたわれる家系がカタログで取り上げられるきっかけとなった *ehoie* は、彼女であったのかもしれない。

ヒュベルメーストラーの子孫が終わると話がポルターオンの3人の娘に移り、この娘たちが断片26の5行目に *ἦ' oīai* で導入されている事実をみると上記の説はある程度支持され得る⁽¹⁸⁾。ポルターオンはデーモディケーの兄弟である。ヒュベルメーストラーの物語のあと、母祖デーモディケーの世代まで話が大きくとんでもどり、そして新しく *ἦ' oīai* という定式の導入語で次の話が同じようにこの世代から始まっていたとも考えられる。この推測は多分正しいと思われるが、この事実はデーモディケーの *ehoie* 物語が独立した語りの単位であったことよりも、むしろデーモディケーの話が彼女を家系の一員として含むもっと大きな家系の一部分であったことを証明するように思われる。

アイオロスの子孫に関する他の断片とつきあわせてみれば、この解釈の妥当性がはっきりするであろう。しかし上述の断片23a, 25, 26に比べると他の断片は相互の脈絡が明確ではない。そこでここでは *ehoie* に関する話が独立しておらず、*ehoie* で紹介される女がなんらかの形で所属する家系の記述に従属し組み込まれていることを示すもっとはっきりした例を取り上げてみたい。そのためには断片43aで語られる物語が適当と思う。

この断片の1行目の後半にポリュメレー (Polymele) の名が見えるが、彼女もひとつの *ehoie* であるとするならば、43aでは神に愛された3人の女の物語が語られていることになる。しかし、この3つの *ehoie* はどのような形でも構成の基盤を形成してはいない。それどころかあとの2人のメーストラー (2-69行) とエウリュノメー (70行以下) は系図的にも遠く離れた家系に属している。メーストラーはアイオロス

の娘カナケーの孫であり、エウリュノメーはパンディオーンの孫である。二人がそれぞれの系統に関わらないこの場所で取り上げられている理由は、二人ともポセイドンとの間に子をなしているからとも考えられるが、二人の持つもっと大きな共通項は、シーシュポスが息子の嫁にと望んで結局は得られなかったという点であろう。ポセイドンとの関係も、シーシュポスがゼウスの意図をはかりそこねて無駄な求婚の努力をしたという話の枠のなかで語られている。この二人の女性はシーシュポスの系図との関わりにおいて登場するのであって、彼女たち自身やその子孫が構成の基盤となっているわけではない。

この断片は小さな ehoie 物語が集められ世代が上のある女を祖とする大きな ehoie 物語に編集されたという説の反証ともなる。シーシュポスは断片 10 ではっきりアイオロスの息子だと言われているから、シーシュポスの母を中心とする大きな ehoie 物語は考えられない。かといってアイオロスの父ヘレーンの世代にまでさかのぼってもっと大きな ehoie の構成を探すならば、ギリシアの英雄すべての原母のようなものいきあたりざるをえず無意味である⁽¹⁹⁾。そうすれば『カタログ』はいくつかの ehoie によって構成されているのではなく、ただひとつの ehoie を構成しているということになってしまう。そのうえ小さな ehoie が大きな ehoie に編集されたという説は、文献伝承や厳密なテキスト解釈によって導き出されたものでないことを忘れてはならない。残存する ehoie がひとつも独立した語りの基本単位を構成しないため、規模の大きな ehoie を想定せざるを得なかったというのがこの説が編み出された理由であろう。

以上の考察から言えるのは、断片の順序を並べなおし再構成することで序歌とカタログの内容の不一致を取りのぞくことはできないということである。このカタログは、少なくともその傾向からすれば、どちらかというとも男の家祖を頂点とするギリシアの英雄世界の貴族名簿を形成しており、神々と子をなした女たちと子孫がなんらかの順序でカタログ的（列伝風）に並べられているというものではない⁽²⁰⁾。そこで序歌が本来このカタログに属するのか、それとも他の失われた「名婦列伝」の序歌だったと考えるほうがよいのかという問いに戻らざるを得ない。いずれにせよこの序歌と現存断片の内容との間に考慮に値する関係が存在するかどうかを検討されねばならない。もしこのような関係が存在しないということであれば、古い核が恣意的に拡大されていたという所見が両者の内的脈絡のなさの唯一実際的な説明といえるかもしれないのだ。

II

そのためには、序歌の正確な意味と意図を可能なかぎりくわしく再構成することが必要である⁽²¹⁾。序歌は20行あまりの断片として伝承されているが、完全に読み取れる行は一行もないという事実が、この作業が困難であることを予想させる。しかし幸いなことにこのパピルスには行の前半が多く残っているので、定式的になりがちな後半が伝承されているよりは、詩人の思考を追いやすいといえる。

まず1-7行までをとりあげたい。

Nîn dè gynnikṓn |fūlon áeísaτε, ḥdúnepiai
Μοῦσαι Ὀλυμπιάδε|ς, κοῦραι Διὸς αἰγιόχοιο,
αἶ τότ' ἄρισται ἔσαν[
μίτρας τ' ἀλλίσαντο .[
 5 *μισγόμεναι θεοῖσ[ιν*
ξυναὶ γὰρ τότε δα|ίτε|ς ἔσαν, ξυνοὶ δὲ θόωκοι
ἀθανάτοις τε θε|οῖσι καταθυητοῖς τ'ἀνθρώποις.

1-2行では全体の主題が述べられる。すなわちこの詩のテーマは女たちのある族についてである。3-5行はその族の性格を明確にしてゆく。つまり彼女たちは当時の最も高貴な女たちであり(3行目)帯を解き(4行目)神々と交わった(5行目)。ということは神々の子を産んだ女たちである。

人間の女と神々の接触は、この詩の作者の時代にはもはやあたりまえのことではなくなっていたにちがいない。なぜなら6行以下ではなぜこのような交わりが可能であったかという理由があげられているからである。「あのころは、すなわち不死の神々と可死の人間との間に一緒に食事、一緒に会合があった。」(6-7行)

詩人が *τότε* と記している時代または時期がいつであるかに関してはさまざまな議論が行われてきた。しかしこの *τότε* が詩人の生きているいまの時代とは異なる時代を示すものとして使われていることは疑いをいれない。6-7行のもつ理由づけの機能はそれでこそ生きてくるのである。詩人の時代の人々は神々が人間の女を愛するということをもう想像することができなかったで、それが可能な「あのころ」という時代があったと説明しなければならなかったのだ。

しかし、この「あのころ」とはどの時代であろうか。ウェストが1961年発表した論

文⁽²²⁾以来これはヘシオドスの『労働と日々』で語られる五時代神話のなかの黄金時代と関係づけられてきた。ウェストの考えによれば、11-12行において「あのころ」の人間の一部は長く(δηρόν)また若く(ἡλθεοι)⁽²³⁾生きたとされているが、これは『労働と日々』のなかで黄金時代の人々が「悪しき老なしに」いた⁽²⁴⁾と描かれていることに適合するというのだ。

しかし、次にあげる事実を考慮するならば、この説は容易には受け入れがたいものである。まず10行目で「あのころ」の人々もやはり老いを目の前にしていたと明言されている。そのうえ12-13行では彼等の一部が突然、それも若死にすると記されているように見える。このようなグループに関しては黄金時代でも銀の時代でも言及されていない。さらに序歌で描かれる「あのころ」の人間たちが「まだ完全な幸福のうちに生きていた」最初の人間である⁽²⁵⁾、または「いまよりも良い生活を送っていた」⁽²⁶⁾ことが明らかであるとも思えない。ここに書かれていることからだけでは彼等の幸不幸に関してははっきりしたことは何も言えない。現存するテキストが「あのころ」の人間について現に記しているのは、彼等が神々と接触を持っていたということであり、このことが不安のない豊かな生活と幸福を意味していたかどうかについて言及されているわけではない。

また「あのころ」の人間たちが最初の人間であり、プロメーテウスがゼウスを欺く前の黄金時代に生きていて、彼等が神々と親しい交わりを持っていたとする推論⁽²⁷⁾は誤りである。なぜならば、「あのころ」神々が人間と接触を持っていたという表明は、神々と人間がまだ一緒に食事をしたり逢ったりした「あのころ」にこそ、神々と人間の女の交わりも可能であったというわけを説明するものなので、このようなことが起こり得た時代は序歌においてのみ描かれるのではなく、この詩で語られる出来事すべての舞台となる時代でもある。この時代とは疑いもなく、英雄たちが活躍する時代であり、プロメーテウスの欺きの前に生きていた最初の人間の時代ではない。

次の8-13行の解明は前行までよりもむずかしい。

οὐδ' ἄρα ἰσαίωνες οὐμ[
 ἀνέρες ἠδὲ γυναῖκες ε[
 10 ὀσσόμεν[ο]ι φρ[εσὶ] γῆρ[ας
 οὐ μὲν δηρόν ε[.]κ[.
 ἡλ[θ]εοι, τοὺς δ' εἰθ[αρ] ε[.
 ἄ[θ]άνατροι [νε]ότητ[

8行目は「あゝのころ」の人間たちが「……と同じくらい長くは生きなかった」と読める。ステューヴェはこの序歌の「陰気な」思考傾向を表現するとして「不死の神々と同じくらいには……」という句を補っている⁽²⁸⁾。しかし、このように補うと6行目から続いている思考が途切れてしまうことはステューヴェ自身も認めている。そのうえ7行目ですでに神々と人間が不死と可死に区別されているのに、さらにこのあたりまえの事実の言及が余分に付け加えられたとも思われぬ。また詩人の時代の読者（聴衆）には、英雄たちが神々と同じような永遠の命を所持していなかったことを、わざわざ説明する必要もなかったはずである。

ここでメルケルバッハの説を検討してみると、彼は8行目では「あゝのころ」の人間（もちろんメルケルバッハにとっては黄金時代の最初の人間であるが）の寿命といまの人間の寿命とが比較されていると考える⁽²⁹⁾。しかし、「いまの人間と同じくらいには長く生きなかった」と補っても、次にくる11-13行との論理的つながりは不明である。11-13行では「あゝのころ」の人間が長く生きるグループと突然死におそわれるグループとに分けられるからである⁽³⁰⁾。もちろん、ここにはなんの論理的関連もなく、8行目は「あゝのころ」の人間についての情報をもうひとつ付け加えるだけのものかもしれない。だとすると、この人間たちは、神々と接触し（7行目）今日の人間たちより長生きをした（8行目）と語られていることになる。しかし、このようにして8行目と与えられる情報は、「あゝのころ」の人間たちが黄金時代の人々であるときのみ意味を持つ。なぜなら英雄たちが今日の人間より長く生きたと伝える古代の文献は伝承されていないし、また英雄たちすべてが長命であることの意味も不明確だからである⁽³¹⁾。

8行目の「あゝのころ」の人間の寿命が神々とも、いまの人間とも比べられていないとすれば、次に考えられるのは同時代の人間同志が比べられているということである。ところで、英雄たちの間の寿命の相違といえば、叙事詩の英雄が名を高めて戦死するか名もなく長生きするかの選択を迫られることが知られている。アキレウスが最も良い例であろう。ヘシオドスにおいても英雄たちが寿命によって二組に分けられているとも考えられる。『労働と日々』では英雄たちの一部はテーバイの戦いで、一部はトロイアの地で倒れ「他の者たちにはクロノスの子ゼウスが人間たちからはなれて生活（βλοσυρον）と住居を与え、地のかなたに住ませた。そこで彼等は幸せに暮らした」と語られる（161-173行）。ヘシオドスの分け方と叙事詩の英雄の選択との間に関連があるかどうか、またあるとしてもどのような関係であるかを一概に言うことはできない。しかし、叙事詩世界において、英雄の生き方と寿命の間になんらかの関わりがあると考えられていたことは確かであろう⁽³²⁾。そこで『カタログ』の序歌8-13行でも英雄

の長命と短命の区別がうたわれていると解釈してもよいのではないだろうか。つまり、8行目の *ἀρα* を含む文章が寿命の相異という「あのころ」の人間の特徴を紹介し、11-13行である者は長生きし、ある者は神々によって突然死をもたらされたとくわしく述べられると考えるのである。この「ある者」をどのように分けるかに関して、9行目に *ἀνέρες ἠδὲ γυναῖκες* とあることから男女の区別という可能性もある。しかし、11-12行の *οἱ μὲν...τοὺς δέ* を考慮すれば男たちのふたつのグループとするべきであろう⁽³³⁾。実際『カタログ』の中には後述するように、神々の手によって討たれ不慮の死に遭遇する一群の英雄が登場し他から際立ったグループを形成するが、このこともこの解釈に適合しよう。この英雄たちは男神と人間の女の間に生まれた神々の息子であって、超人的な力と才能に恵まれているがゆえに人間に討ち負かされることはないが、神々との争いに巻き込まれて命を落とすのである。不死の神々の可死の子孫が形成するこのグループが12-13行でとりあげられ、英雄時代の他の者たちとは異なる性格づけをされているとは考えられないだろうか⁽³⁴⁾。

さて1-13行の内容の再構成によって序歌の提示する主題がもう少し明確になり、序歌と『カタログ』全体との関係の検討に役立ついくつかの推論が得られたと思われる。まず序歌では神々の愛人だけではなく、神話的英雄世界全体について語られている。1-5行で神々の子を産んだ人間の女の族に限られていたかのように見えた主題は、そのような異常な交わりが可能であった理由が述べられることで英雄世界全体へと広がっていく。半神が生まれ得るような世界は、まだ神々と人間の接触があった世界である。これを受けて話は自然にこの世界の住人の描写へと移っていく。彼等の間には重要な相違があり、急激な死にみまわれる勝れた神々の息子たちと常人とが区別される。こう述べたあと、序歌は14行で神々の子を産んだ女たちへともどり、再び詩女神に呼びかけ女たちと交わった神々の名を一人一人読み上げる。

すなわち「名婦列伝」という主題の他に序歌はまだ(1)「あのころ」といまの時代の相異と(2)「あのころ」内部における相異というふたつの重要な観点を包含している。第一の相違において決定的なのは「あのころ」はまだ神々と人間に共通の場があり得たが、いまはなくなっているという点である。

III

序歌で表明されたと考えられる上記の点について、次に『カタログ』の他の断片においても検討されねばならない。序歌の主題がこの作品の他の部分でもなんらかの役

割をもち得るか否かを調べ、その役割の重要度を明らかにしたうえで、もういちど序歌の精確な意図および序歌と現存する『カタログ』との関連が問われなければならないからだ。そこではじめてこの序歌が現存する『カタログ』断片の一部であり両者が結びつくと主張し得る。

その際、『カタログ』の最後の部分との照合が特に重要であろう。最終部分が最初と一致すれば、そして、最初に提示された所見を前提にしたり、最初のテーマに言及するようなことがあれば、両者の一体性は明らかである。幸いなことに『カタログ』の最終部分に属するとみられる大断片とこれを取り巻くいくつかの小断片が我々に残されている (F 196-204)。この断片はヘレネーの求婚者に関するものであるが、系図の順序からもパピルス学上からも全体の最後の部分を構成することがかなり確実である⁽³⁵⁾。また物語の内容からいっても英雄の系譜を語る作品の最後にしか位置しえない。ヘレネーに求婚し求婚の際の誓いに縛られてトロイヤ戦争に参加するのはギリシア中の家系に属する当時の英雄全員であるから、彼等ひとりひとりの誕生がうたわれて英雄たちがすべてでそろった後に物語られるはずである。もしヘレネーの結婚がレーダーの父テストィオスや祖母デーモディケーの系譜のなかで語られたとしたならば、彼女の求婚者の多くはその前にはまだ言及されていなかったことになる。たとえばイードメネウスはテストィオスの子孫の系譜のずっと後に位置するイナコスの子孫の部分で生まれるはずだから、ヘレネーへの求婚が彼の誕生前にくることになる。そして最大の矛盾は、断片 204 の 96 行以下で言われる、すべての英雄を滅ぼそうとするゼウスの計画が実行される時点が全員の登場前に来てしまうということである。しかしこれらの外的理由にもまして、断片 204 の詩句はこのヘレネー部分の結末的性格を明らかにすると思われる。特に 95-104 行が注目に値する。

- 95 *ἀελπτου. πάντες δὲ θεοὶ δίχῃ θυμὸν ἔθεντο*
ἔξ ἔριδος· δὴ γὰρ τότε μῆδετο θέσκελα ἔργα
Ζεὺς ἠψιβρεμέτης, † μείξαι κατ' ἀπείρονα γαῖαν
τυρβάξας, † ἤδη δὲ γένος μερόπων ἀνθρώπων
πολλὸν αἰστώσαι σπεύδῃ, πρ[ό]φασιν μὲν ὀλέσθαι
- 100 *ψυχὰς ἡμιθέω[ν]ρισι βροτοῖσι*
τέχνα θεῶν μι[...]. [...]. [όφ]θαλμοῖσιν ὀρώντα,
ἀλλ' ὃ μ[έ]ν μάχ[α]ρες κ[.....]ν ὧς τὸ πάρος περ
χωρὶς ἀπ' ἀν[θ]ρώπων [βλοτον κα]ῖ ἤθε' ἔχωσιν

το[...]ε.εαλ[ἀθα]νάτω[ν τε ἰδὲ] θνητῶν ἀνθρώπων

この断片の最初の部分では、それぞれの英雄がいかにヘレネーに求婚したかがうたわれるが、求婚者全員がなした誓い(77-85行)とメネラーオスの勝利(85-87行)にふれられた後、当時アキレウスはまだ幼かったので求婚者のなかにいなかったと語られる(87-93行)。94行目ではヘレネーの娘ヘルミオネーの誕生が告げられるが、それから物語はだしぬけになんのつながりもなしに、まったく別のテーマに移行する。95-96行によれば「すべての神々は二派に分かれた、争いから」。

この詩句は短く簡潔であるように見えながら、解釈には難しい問題を含んでいる。まず、ここではひとつのことが言われているのか、それともふたつのことが言われているのかがさだかではない。ἐξ Ἐριδος(96行)という付け加えはδίχα θυμὸν ἔθεντο(95行)の状況修飾句にすぎないのかどうか問題となる。つまり「すべての神々が争って二派に分かれた」と解釈すべきか、それとも彼等はすでにもう争っていたのだが「その争いゆえにそのころ二派に分かれた」と解すべきなのかが不明確だ。しかし ἐξ Ἐριδος の位置は Enjambement によって強調されているから後者の解釈が妥当であろう。スティーヴェはこう解釈して、この「争い」とはペーレウスとテティスの結婚式におけるエリスの話だと主張する⁽³⁶⁾。トロイヤ戦争における神々の二派に分かれた争いも、あのと時のエリスの働きがきっかけとなったのだからというのだ。

この説の可能性は否定できないものの、テティスの結婚式におけるエリスはこのテキストには言及されていないのだから、一応考慮の外におくべきだというヴィラモーヴィッツの主張の妥当性も無視できない⁽³⁷⁾。これに対してスティーヴェはエリスの話は広く知られていたからわざわざ文中でふれられる必要がなかったと反論する。

この問題は πάντες...ἐξ Ἐριδος の一文だけではどちらが正しいとも決定できにくい。次に続く詩句との関連を説くヴィラモーヴィッツの所見を検討してみたい。彼の意見によると ἐξ Ἐριδος は δίχα θυμὸν ἔθεντο の副詞句として理由を表す(kausal)可能性が最も高い。すなわち「神々は争っていたので、二派に分かれた」と解すべきである。そして、96行では ἐξ Ἐριδος のすぐあとに δὴ γὰρ τότε μῆδετο... と続くのだから96-104行も明らかに同じような理由づけの機能を持っていると考えるのである。

ということは、ἐξ Ἐριδος でまず総体的にふれられた神々の分裂の理由が、96行以下でくわしく述べられるということであろう。それならば、この詩句自身のなかに神々の争いの理由が見いだせるのだから、他の文献が伝える争いの原因を借用して解

積する必要はないことになる⁽³⁸⁾。

96行以下ではふたつの理由があげられるが、ひとつはゼウスの真の意図であり、もうひとつは彼の公言する表向きの意図によるものだとされる。ゼウスの真の計画は96-99行によると、人類の大部分⁽³⁹⁾をなきものにするとするものだ。それに対して彼が表向きあげた理由は半神をほろぼし、それによって神々の子がこうむってきた何かを終わらせ、神々と人間がきびしく離れていた昔の状態をふたたび確立しようというのである⁽⁴⁰⁾。

ここでわかりにくいのは、どうしてゼウスの計画が神々の争いの根拠となり得るのかが不明であるだけでなく、そのまえにまずゼウスの真の意図と彼の公言とがさかさまであるかのように見えることである。論理的に考えるならば彼のふたつの意図は逆でなければならない。ゼウスの計画において実行され詩人の時代にも継続していた状況は、神々と人間の完全な分離である。この状態をつくりあげるために、不死と可死の結合を体現している神と人間の女の子供である半神の根絶という手段が用いられた。この新しい世界体制を構築するための道具だてとなったのがトロイア戦争である。全人類を巻き込む大戦争によってのみ、ゼウスの望んだ半神の全滅が可能であったからだ。

このようなゼウスの計画とその遂行こそ『カタログ』全体の構成に適合するように見える。たとえばスティーヴェも書いている。「半神の根絶は詩人にとって単にゼウスの表向きの意図として軽く取り扱う以上のものであったはずだ。なぜなら、彼等の滅亡こそ、『カタログ』で語られる神々と人間の女たちの交わりが、なぜ過去に属するかを説明するものだからである⁽⁴¹⁾。」

そこでヴィラモーヴィッツは、半神の根絶こそゼウスの真の意図であったとの解釈がなりたつよう94-104行を読みかえる試みをなすべきと考えた⁽⁴²⁾。しかし、スティーヴェは、そのような新しい読みかえの可能性を探るより、半神の滅亡という作品をつらぬく神話的大筋が詩人にとってここではいちばん重要というわけではなかったと認めようとする。詩人はこの箇所では、ゼウスの滅亡計画が昔の世代の人間一般にもたらした不幸を強調しているのだと。そして矛盾に関しては『『キュプリア』と『世界世代神話』というふたつの異なる資料を用いた詩人がここでつぎはぎをきれめなしにはぎあわせることができなかった」と説明する⁽⁴³⁾。

しかし、このように詩人を批難して問題の解決を作品の欠点のなかに求めようとする前にまず、解釈者の推論の方に矛盾の原因があるのではないかと検討してみるべきだと思われる。

実際先程の解釈にたちもどってみると、前提にされている論理が必ずしもこの詩句の指導理念ではないと思われる点がふたつある。まず思考が矛盾なく表現されるのは、それが我々にとっては自明の既知の論理で無理なく理解できるときのみだとする態度が、文献を正確に把握しようとするとき常に正しいとはかぎらない。第二に *πρόφασιν μέν* はどうしても *δέ* を含む文の対概念として表向きの意図を意味するとの解釈は文献学的にも誤った前提である。「真の、実際の意図」と「公言した、表向きの意図」という対概念はソフィスト以来普及したものであり、『カタログ』の詩人の時代には一般的ではなかった。*μέν—δέ* の対概念は別の意味を持っていたかもしれないのだ。

つまり、ヘルミオネーが生まれたそのころトロイヤ戦争が始まった。叙事詩的思考にしたがえば、ゼウスが「考えた (*μήθετο*)」とは彼が戦争の誘発に「着手した」ことを意味する。これはゼウスの意図というより、『カタログ』の読者が誰でも知っていた事実で、大神が実際に為し、実際に起こったことである。それに反して、ゼウスをこの行為にはしらせた理由と彼が行為の際に持っていた意図は周知の事実ではなかった。

そうだとすると、96-104 行の意とするところはおよそ次のようなものであろう。そのころゼウスは非常に多くの人間を滅ぼす計画に着手した、そして彼の意図であり、彼が公けに表明した理由は半神の根絶であった⁽⁴⁴⁾。なぜなら彼は神の子が人間に立ち交じらず、神々と人間が以前のように別れて暮らすことを望んだからである。

この解釈が正しいとすると、*πρόφασιν μέν* のこの箇所における意味ははっきりする。それは詩人が言わんとした本当の意味での新しい事柄を表している。彼が語ろうとするのは新しい出来事ではなく、よく知られている出来事の新しい解釈である。実際起こった出来事の背後にあるこの新しい解釈を詩人は彼の時代の思考と話法にしたがってゼウスの口から言わせているのだ。これこそゼウスを実際の行為にはしらせた本当の理由であり、ゼウス自身が公けに知らせた彼の意図であると。

こう解釈した場合、さらに問われねばならないのは、96 以下で述べられることが、なぜ 95-96 行の神々の争いの原因であり得るのかである。もし *πρόφασιν μέν* 以下が本当にゼウスの真の意図を表しているならば、神々の争いの原因は『キュブリア』や『イーリアス』で伝えられるヘーラーとアテーナーとアプロディーテー三女神の器量争いではあり得ない。96 行以下ではっきりとトロイヤ戦争のきっかけとして別の原因があげられているのだ。神々の争いもこの別の原因と整合性をもち、トロイヤ戦争同様詩人の解釈にかなう新しい説明をほどこされるはずである。

ではどのようにして、半神を根絶し神々と人間をふたたび離すというゼウスの計画

が神々の分裂のきっかけとなり得たのだろう。残念ながら現存する断片はこの問題について明確には何も語らない。そこでこれから述べることは推測にとどまらざるを得ない。

しかし、神々の分派をひきおこした決定的な要因だけは明らかにできると思われる。というのも、もし神々の息子たちが倒れ死ぬ戦争を、ゼウスが企んだとするならば、この戦いではそれぞれの神ができるだけ自分自身の子を助けようと試みるにちがいないからだ。しかし神々が地上でくりひろげられる戦いのなかで、自分の息子のための介入をするならば、敵方の親である他の神々に対して党派を形成せざるを得なくなり、神々自身のあいだのけんかとなる。トロイア戦争を描く断片が現存していないので、『カタログ』の断片はこの争いについて何も教えてくれない。しかし、このことは現存する部分にこのような争いがまるきり語られていないことを意味するわけではない。神々の息子が争いに巻き込まれ、神々が助けたり守ったりしながら介入して、間接的にはあるが二派に分かれてしまうきっかけをつくったのは、トロイア戦争が最初でも唯一でもなかったからである。

たとえば断片 33 a はポセイドーンの孫ペリクリュメノスの話である。彼は祖父から「さまざまな贈り物」をもらっていた (13-14 行) が、特に姿を変える術をさずかっていた。しかし、断片の叙述によれば、まさにこの贈り物が女神アテーナーの意図によって彼を陥れるもととなった (17-19 行)。ペリクリュメノスは多くの敵を討ち破き並ぶものない強者であったが、これが女神の機嫌を損ね、後にヘーラクレースと戦ったとき、女神は弓をささえてヘーラクレースの手でペリクリュメノスを射殺したのだ (19-36 行)。

またメレアグロスの同じような運命については断片 25 が語る。メレアグロスはアレースの子孫であるため、戦いにおいてどんな人間にも敗けることがなかったが、ついにはアポローンに殺されるのである (9-13 行)。

神々は直接息子を通じてのみでなく、人間と交わる可能性があるからこそ、被保護者を助けてたびたび敵味方に分かれるという羽目に陥るのだった。たとえばシーシュポスはアテーナーのお気に入りであった。シーシュポスが (アイトーンとも呼ばれる) エリュシクトーンの娘メーストラーをめぐって争ったとき、女神は彼を助けてやる。メーストラーはポセイドーンに愛されていたが、この神と同じように姿を変える術をさずかっていた。そこで、彼女の父親は娘をつかって何度も結納をせしめることができた。結婚の贈り物が父親のもとに届けられるや、メーストラーは鼠に姿を変えて花婿のもとから逃げだすのである。しかし、シーシュポスはアテーナーの助けを借

りて、彼等の策略のうらをかき、計略と賢さではすべての人間にまさるといふ評判を得た。しかし、女神にさづけられた狡猾をもってしても彼には「ゼウスの意図」が見通せず、目的を達することができなかった。シーシュポスが息子のグラウコスのためにとり返してやったメーストラは結局ポセイドンに奪われてしまうのである（36-69行）。

同じようなことがグラウコスにはふたたび起こる。シーシュポスはアテーナーのすすめでパンディーオーンの孫娘（ニーソスの娘）エウリュノメーを得ようとするが、ゼウスの *βουλή* に妨げられてふたたびポセイドンに勝ちをゆずらねばならない（70-82行）。

類似の例は他にも数多く見いだせるが、『イーリアス』や『オデュッセイアー』でもよく知られている神々の似たような争いや分派のきっかけとなる出来事が、この『カタログ』でも語られているのは明らかであろう。そこで、半神の全滅を期して起こされたトロイア戦争における神々の争いは、神々と人間の最初の交わり、つまり、『カタログ』の言葉を借りれば、神と人間の女の最初の子から始まった状態の進展の最後の段階を形成していることになる。

それゆえ、半神を根絶して神々と人間を永久に分けてしまおうというゼウスの計画の動機も推察が容易になる。ゼウスはこうして神々の中の争いの恒常的要因を取りのぞこうとする。神と人間の女の交わりを通して、人間界に神的な力が直接作用するかぎり、神々自身も常に人間とのごたごたに巻き込まれずにはいないからである。

このゼウスの意図の仔細を知るためには、『カタログ』におけるヘレネーの役割と位置が重要であろう。断片 204 によれば、ヘレネーの求婚者が誓いをしたため、その誓いに縛られてトロイアに遠征することになっている。ヘレネーの美と魅力がゼウスの計画の遂行に決定的な役割を演じたことは確かである。しかし、ヘレネーについては系譜上の位置も不明確で、父母を特定することもむずかしい⁽⁴⁵⁾。ゼウスとヘレネーとの関わりに言及する箇所が存在すれば、ゼウスの意図もより明確な姿をとるであろう。

このように個々の問題に関しては不確かなところが多く残らざるを得ないが、これまでの考察から得られた結論からだけでも、『カタログ』全体の主旨に関していくつかの確実な点があげられる。序歌は「あのころ」は神々と人間の女の交わりがあったと告げ、このテーマをかならずしもこのテーマ自体と常に関わるわけではない別の話題、すなわち神々と人間がまだ直接接触していた時代に関する話と結びつける。神々と人間共通の生の場があった時代について序歌はいくつかの重要な基本的特徴を述べる。この詩句が完全な形ではなく断片としてしか現存していないという事実にもかかわらず

ず、突然思いがけない死に襲われる人間の人生も、この時代の特徴のひとつを形成していると言えるのではないだろうか。神々と人間の交流の時代についてこのような、そして似たような特殊性を述べた後、序歌は神々と人間の女の交わりというテーマにもどり神々の名をあげて分化する。

このことは序歌で告げられる主題が単に神々と人間の女の情事と子孫に関するカタログ的報告に終わらないことを意味しているのではないだろうか。序歌の本来の意図はむしろ神々と人間の女の交わりを、神々と人間の間はまだ往来があった時代を描くにもっとも適切な特徴としてとりあげることだったと思われる。しかし序歌の作者にとってはこの交わりをすぎさった過去の輝かしい出来事として賛美するだけが目的ではない。詩人は同時にこの時代の悲劇と没落の根源を、序歌においてすでに、この交わりのなかに見て取っている。

神々と人間の女の息子たちがくりかえし引き起こし、また巻き込まれた大小の個人的悲劇が数多く語られたのち、『カタログ』の最後は序歌で提示された一般的論題にもどる。すなわち人間の女から生まれた神々の息子たちがたびたびお互い同志、または神々と軋轢をおこし、神々同志の争いに発展したこの時代にゼウスは決定的な終局をもたらず意図を持つに至る。このように『カタログ』全体の主旨と同時に作品の最初の部分と最後の部分の関連が確定され得ると思われる。まず序歌では、神々と人間の女の子の誕生がまだ可能だった時代について、もうそのようなことがなくなってしまったいまの時代から、ふりかえってうたわれる。そして、作品の最後は、このような交わりがどうして永久に絶たれてしまったかを語る。この交わりが始まることでひとつの時代が始まり、この交わりの可能性が絶たれることでその時代が終る。この時代とは英雄と半神の時代であるが、この時代を特徴づけているのは地上に持ち込まれた神々同志の争いであり、この特徴がまたこの時代を詩人の時代からわけ隔てもいる。神々の争いは常に個々の神々の息子の死をひきおこしたが、最後に半神はトロイヤ戦争で滅亡してしまう。

このように見てくると、『カタログ』は神々の子を産んだ人間の女とその子孫を数えあげるための「名婦伝」ではない。この『カタログ』が神々と人間の女の交わりを主題に据えたのは、この交わりこそが、この作品で語られる時代をそれ以前とそれ以後の時代から分ける最大の特徴であったからである。

注

1. 現在はこの作品がヘシオドスの真作ではなく後世の詩人の作品に彼の名を冠したという説が有力である。橋本隆夫「ヘーシオドス」35 および 44 頁（松本仁助・岡道男・中務哲郎編『ギリシア文学を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1991 年）と M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 125-128 参照。
2. R. Merkelbach, *Die Hesiodfragmente auf Papyrus*, *Archiv für Papyrusforschung* 16, 1956, 58 (dasselbe als Sonderausgabe, Leipzig 1957)
3. Merkelbach-West, *Fragmenta Hesioidea*, Oxford 1967
4. M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985
5. G. Marckscheffel, *De Catalogo et Ehoeis, carminibus Hesiodiis*, Breslau, 1838, 22 ff. (= Hesiodi, Eumeli, Cinaethonis, Asii et Carminis Naupactii *Fragmenta*, Lipsiae 1840, 119 ff.)
6. K. Heiling, *Der Freierkatalog der Helena im hesiodischen Frauenkatalog I*, *Museum Helveticum* 40, 1983, 28-34 参照。
7. M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 33, 35, 38, 47/48, 56, 121/122
8. C. Robert, *Zu Hesiods Theogonie* (1905), *Wege der Forschung* Bd. 44, Hesiod, Darmstadt 1966, 157-160 では、この 2 行は挿入句ではなく典型的な賛歌の結びの句であるとの興味深い見解が述べられている。
9. ほとんどすべての研究者がこう否定するが M. Treu (*Das Proömium des hesiodischen Frauenkataloges*, *Rheinisches Museum* 100, 1957, 169-186) のみは例外。
10. U. von Wilamowitz-Moellendorff, *Hermes* 40, 1905, 124 と A. Rzach, Artikel "Hesiodos" *RE* VIII, 1, Sp. 1206 参照。最近では注目すべきことにハイリンガーがふたたびこの説を支持している (Kurt Heiling, *Der Freierkatalog der Helena im hesiodischen Frauenkatalog I*, *Museum Helveticum* 40, 1983, 19-34)。
11. M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 122 "…and how ingeniously it was constructed. The Ehoiai were not flotsam but organic, immovable parts of the whole. We have found no reason to treat any section of the poem as an addition or interpolation."
12. Max. Tyr. xxvi. 4 p. 312 Hobein (Merkelbach-West, *Fragmenta Hesioidea*, 2), "*ἀπὸ γυναικῶν ἀρχόμενος καταλέγων τὰ γένη, ὅστις ἐξ ἧς ἐφυ.*"
13. K. von Fritz, *Das Prooemium der hesiodischen Theogonie*, *Festschrift Snell* 1956, 29 ff. および E. Siegmann, *Zu Hesiods Theogoniproömium* (1958), *Wege der Forschung*, Hesiod, 318-323 参照。
14. Diodorus Siculus, *Bibliotheca*, IV 14, 4
15. M. Treu, *Rheinisches Museum* 100, 1957, 175 参照。これに対する反論は M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 35 参照。

16. 断片 23 a は P. Oxy. 2075 fr. 4 と 9; 2481 fr. 5 col. i; 2482; P. Michigan inv. 6234 fr. 2 をつきあわせたもので、断片 25 は P. Berol. 9777; P. Oxy. 2075 fr. 1; P. Oxy. 2481 fr. 5 col. ii; 2483 fr. 2 をつきあわせたものであるが、これらのパピルスをもてふたつの断片が内容のみならずパピルス学上も近い関係にあることがわかる。特に P. Oxy. 2481 fr. 5 という同じパピルスの col. i に断片 23 a が、col. ii に断片 25 がかけられていることを顧慮すると両断片の間に大きな間隙があるとは考えられず両者は隣接した詩行である。
17. Schol. Pind. Nem. X. 150 a (Fr. 24) はヘレネーをゼウスとオーケアノスの娘の間の子とし Schol. Eur. Or. 249 (Fr. 176) はヘレネーをレーダーの娘とする。
18. 断片 25 の次に 26 が続くことは同一パピルス P. Oxy. 2481 fr. 5 の col. ii (断片 25) と col. iii (断片 26) のかわりから明らかである。そして col. iii はヒュベルメーストラーの子孫の記述の最後の部分 (1-5 行) のすぐあとに Paragraphos で区切っただけで、ポルターオーンの娘たちの物語をのせている。
19. ウェストはピュラーとゼウスの関係を想定して、最初の ehoie としているが、確証はない (M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 56)。
20. Schmidt-Stählin, *Griechische Literaturgeschichte i (I)*, München 1929, 267, がすでにそう考察している。
21. 序歌の解釈に関しては基本的には A・シュミットの論 (Arbogast Schmitt, *Zum Proömion des hesiodischen Frauenkatalogs*, *Würzburger Jahrbücher für die Altertumswissenschaft*, NF Bd. 1, 1975, 19-31) に従うが、彼の説においては英雄時代と現在の人間の相異、また英雄時代の人間相互の相違について不明確な点がある (29-30)。
22. M. L. West, CQ 11, 1961, 132-6 さらに M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 124 参照。
23. この言葉の本来の意味は「まだ結婚していない」(それゆえまだ若い)。
24. 『労働と日々』111-116 行参照。
25. R. Merkelbach, *Das Proöm des hesiodischen Frauenkatalogs*, *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, 3, 1968, 128 参照。
26. M. L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford 1985, 124: "The system of genealogies is framed by a poem and a concluding narrative which both present the same idiosyncratic picture of the heroic period as a kind of Golden Age in which the conditions of life were better than they have been ever since."
27. R. Merkelbach 前掲書 132 参照。
28. K. Stiewe, *Die Entstehungszeit des hesiodischen Frauenkatalogs*, *Philologus*, 106, 1962, 292 および *Philologus* 107, 1963, 23/24 参照。
29. R. Merkelbach 前掲書 128 参照。
30. 11-13 行で言及されるのが寿命の長さの相違であるとは従来の研究で定説となっている。11 行目では「あのこと」の人間のうち何人かが何かを長く (*δηρόν*) 持つかまたは行っていった。それも 12 行目でいわれているとおり *ήτθεοι* として。(この *ήτθεοι* が述語的に使用され同格であることは文章のなかの位置からも確かである。)そして、他の者たちは突然 (*εἴθαρ*) 神々により何かに遭遇する。メルケルバッハの考えによれば、彼等はそれによって神々に等しいものとなる。

31. ウェストはサルペードーンやネストールの例をあげて 8-13 行を英雄たちの間における寿命の相違と解釈しているようである (The Hesiodic Catalogue of Women, Oxford 1985, 124) が、以前 CQ (11, 1961, 141) に発表した論文では黄金時代と銀の時代と青銅時代の人間の寿命と関係づけている。
32. W・マルクもこの箇所を同じような脈絡において解釈する (Walter Marg, Hesiod, Sämtliche Gedichte, Zürich 1970, 404)。
33. Oxyrhynchus Papyri XXIII, 3 参照。
34. 英雄たちが至福者の島に運ばれて長寿を享楽する可能性について現存するテキストが何を語るのか、ウェストはゼウスの支配下で地下にある蛇との関わりを暗示するが不明確である。M. L. West, The Hesiodic Catalogue of Women, Oxford 1985, 120 ff. 参照。
35. M. L. West, The Hesiodic Catalogue of Women, Oxford 1985, 43 と 119 ff. 参照。
36. Stiewe, Philologus, 107, 1963, 5 参照。
37. U. von Wilamowitz-Moellendorff, Berliner Klassikertexte Vol. I, Berlin 1907, 31 ff. 参照。
38. ウェストの解釈は "They (the gods) were riven with dissension because of Zeus' great plan..." M. L. West, The Hesiodic Catalogue of Women, Oxford 1985, 119.
39. 99 行の *πολλόν* は行のはじめに位置し、Enjambement で強調されている。
40. 99-104 行はバピルスの行の真ん中が破損されていて保存状態が良くない。しかし、102 行目の *άλλ'* と 103 行目の接続法 *έχωσιν* によって詩人の考えの論理的脈絡がかなりはっきりする。すなわち *άλλ' ... έχωσιν* は目的結果を表す従属文であり、この文の前には同じように目的結果を表す従属否定文がこなければならぬと考えられる。そこで、100 行目の *ψυχάς ήμιθέων* のあとに 101 行目の *τέκνα θεών* を主語とする *μή* ではじまる目的文 (…でないように) を想定し、*άλλ'* 以下「そうではなく……であるように」とつなげる。ウェストの解釈はこれとは異なりゼウスの計画は戦いをおこして数多くの人間を滅ぼし、神々の息子を離れた場所に彼等が最初に享楽していた楽園の状況に移そうというものだとする。(West, 前掲書 119)
41. Stiewe, Philologus, 107, 1963, 1-29 参照。
42. U. von Wilamowitz-Moellendorff 前掲書 31 ff. 参照。
43. Stiewe, Philologus, 107, 1963, 8 参照。
44. *πρόφασιν μέν* の叙事詩言語的解釈に関しては Walter Marg, Hesiod, Sämtliche Gedichte, Zürich 1970, 516 参照。マルクはここで *πρόφασιν μέν* を Vorwand ではなく Vordergrund すなわち näheres und enges Ziel と解している。
45. 注 16 参照。